

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24320173

研究課題名(和文)被災地の民族誌 - 東日本大津波の被災者とそのコミュニティに関する人類学的研究

研究課題名(英文) Ethnography of the stricken areas: Anthropological study on victims of the Great East Japan Tsunami and their communities

研究代表者

李 仁子 (LEE, INJA)

東北大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80322981

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東日本大震災の津波被災地において人々の生活再建や地域の復興がどのように進むのかを明らかにするために、複数の調査地で長期にわたる文化人類学的調査を行い、被災者の移動に伴う生活相の変化や、被災者を取りまく社会的環境の変化、さらには彼らのコミュニティに生じた再生や変容を詳細に記録した。再建や復興のプロセスは一様かつ直線的なものではなく、被災の程度、行政による施策の影響、震災前から家族やコミュニティに内在していた諸条件、外部からのボランティアとの関わり方等々といった様々なファクターにより多様かつ複雑に展開するのだが、その全容を民族誌的に記述するためのデータを蓄積することもできた。

研究成果の概要(英文)：In this study, in order to clarify how people's life rebuilding and regional reconstruction proceeds in the afflicted area of the Tsunami of the Great East Japan Earthquake, we conducted a long-standing cultural anthropological survey at several research sites and recorded in detail changes of the lifestyle accompanying the movements, changes in the social environment surrounding the affected people, and the regeneration and transformation that occurred in their communities. The process of rebuilding and reconstruction is not uniform and linear. Although it develops diversely and complicatedly due to various factors such as degree of the suffering, the influence of administrative measures, various conditions inherent in families and communities before the disaster, how to engage with volunteers from outside, etc. but we was able to accumulate data to describe the whole aspect of it in our ethnography.

研究分野：文化人類学

キーワード：東日本大震災 津波 被災地 被災者 コミュニティ 復興 局地的異文化 災害民族誌

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の立案経緯

本研究の代表者である李はこれまで、「移住者」にとっての「安住」をテーマに、在日コリアン、北朝鮮からの脱北者、韓国人ニューカマーを対象として、そのコミュニティやネットワークを調査研究してきた。また、東日本大震災の数年前からは、国際結婚をして東北地方の過疎地に嫁いだ外国人妻とその家族に関する調査にも着手した。中でも、15年以上を日本で過ごし、今では地域の「人材」にまでなった外国人妻たちに注目し、彼女らが地元のコミュニティとどのように関わってきたかを明らかにするべく、宮城・山形・秋田・岩手とフィールドワーク先を広げてきた。その矢先に3.11大津波が発生した。被災地がある程度落ち着いた6月から、連絡のついた外国人妻を見舞いながら沿岸地域を回った。そこで目の当たりにしたのは、津波の大きな傷跡であり、自宅や仕事を流された被災者たちがあたかも移住を強制された人々のように散り散りに避難している状況であり、存立基盤を失って崩壊の危機に瀕している沿岸各地のコミュニティの姿であった。その後、何度か沿岸地域を車で回り、避難所や被災地区に暮らす被災者から話を直に聞くことができた。そこで語られたものは、これまで活字で読んだ過去の震災研究からは想像もつかないものであった。記録として残さなければ、と思った。こうした被災地の現状を前にして、人文学の一学徒として、また移住者研究を行ってきたフィールドワーカーとして、何が出来るだろうか。その答えが、本研究である。

(2) 研究の学術的背景

日本の三陸沿岸は幾度も大津波の被害に遭っており、その一端は、昭和三陸大津波(1933年)の被災地を徒歩で調査した山口弥一郎の労作『津浪と村』(1943年)から窺い知ることができる。山口は地理学者であるが柳田國男の薫陶を受けており、その著作において民俗学的な調査知見を織り交ぜた記述を行っている。しかし、そうしたスタイルの調査記録や研究文献は、その後絶えてしまう。一方、阪神・淡路大震災以降、防災研究の分野では、災害民族誌を模索する動きがあり、人類学的手法に対する期待が高まっている。日本の人類学でも災害に対する関心が広がり、関西の研究者らを中心に世界各地の災害の比較研究等の成果が積み上げられてきている。ただ、こと日本国内の災害に限ると、地震や津波、水害などが非常に多いにもかかわらず、定量的調査に基づく研究の占める割合がきわめて大きい。しかし、災害というものは、日本の国内であるか国外であるかを問わず、日常的には体験できない未知の異文化とも言えるものである。だとすれば、「千年に一度」と言われる東日本大津波の被災地を、災害という大規模な環境変化が生み出した局地的異文化として見る必要もあろう。我々

の日常的な理解の文脈をいったん外して、被災者と彼らをとりにまく環境や制度を、被災地の文脈で捉えること。そのためには、異文化理解の学としての文化人類学の研究手法と、異文化の全容を外部の人間にも理解可能な形で提示する民族誌的な記述方法が最も相応しいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、被災地を、災害という大規模な環境変化が生み出した局地的異文化として見る。その上で本研究は、3.11東日本大津波の被災地において文化人類学的調査を行うことによって、被災者やそのコミュニティが被災した環境変化と、そこからの再生・復興の初期過程を民族誌的に記述し、後世に記録として残すことを目的とする。そのために、被災地域から数カ所の調査地を選び、9ヶ月の予備調査を含む4年以上の期間にわたって、繰り返し現地調査を行うことにより、被災者の移動に伴う生活相の変化や、被災者をとりにまく社会的環境や条件の変化、さらには被災したコミュニティが再生・変容していくプロセスを、ホリスティックに記録し続ける。本研究の成果が被災地の民族誌として、今後の震災時や学際的な災害研究に貢献することを目指した。

その際、具体的には以下のような諸事象に特に注目し、重点的に調査を行った。

被災者の移動：被災後、人々はどこに身を寄せ、どのように生活の拠点を求めて移動したか、その足跡は裏を返せば地元にあったコミュニティの変容過程でもある。行政の施策に翻弄されつつ移動を重ねた被災者らの軌跡を追い、それを一つの基本軸として、生活の再建や人との関わりの変化を跡付ける。

生業と復興：津波によって沿岸部の生業はほぼ壊滅した。しかし、その後の復興度合いは地区や集落によってまちまちである。国や自治体の施策に翻弄されるであろう今後も含めて、地場産業の再建・変容をコミュニティとの関係の中で記録していく。

被災コミュニティとリーダー：災害による環境変化は人間の布置にも及ぶ。旧来のリーダーが失われたコミュニティや臨時のコミュニティ(避難所や仮設住宅など)に生まれる新たな人間関係やリーダーに着目し、コミュニティの内部変容を調査する。

ボランティアと被災者：被災地という異文化に外部から支援に訪れるボランティアは、時に文化接触による新たな動きを生むと同時に、時に文化摩擦による軋轢も生じさせる。こうしたボランティアのさまざまな活動と、被災者との交渉過程を記録する。また、復興とともにデザインできるボランティアと被災者の持続的な協働関係にも注目する。

社寺と祭礼：地区住民らの宗教的拠り所であった被災地の寺や神社は、伝統的な祭礼の舞台でもある。コミュニティの統合にも関わる社寺や祭礼の存続あるいは再興をめぐる

動きを記録する。

子どもと遺族：数多くの子どもたちが津波で亡くなった地区では、同級生を失った子どもたちや子どもを失った家族たちが心の傷を抱えたまま、復興の波に巻き込まれていく。そうした被災者の「心の復興」はどのように進むのか、長期的スパンで見つめ続ける。

3. 研究の方法

本研究では、まず予備調査に基づいて5つの調査地を選び出したが、実際の調査を進めていく過程で、距離的な理由から調査継続が難しかったり、比較調査にもっと相応しい地域が見つかったりして多少の変更が生じた。どの調査地も被災地としての共通点を有するが、それぞれ特徴を持った調査地であり、その中には甚大な被害をこうむった地区とそれに隣接しながらさほどの被害を受けなかった地区といったような調査地も含まれる。すべての調査地に足しげく通いながら、予備調査から数えて4年以上の期間にわたって現地調査を行い、被災地が変化していくプロセスを記録することを目指した。

調査の具体的な方法であるが、まず被災者への聞き取り調査は細心の配慮を払いつつ、なるべく話者の自由発話に任せる形（Unstructured Interview）で行った。予備的な聞き取り調査の経験から、津波被害の傷が癒えないこの時期においては、被災者が語りたことを語ってもらう方が良策と考えたからである。また、調査者に対して繰り返し語られるような、被災者にとってプライオリティの高い話題は、被災地の民族誌にとって重要なテーマとなるはずだからである。

個々人への聞き取りのほか、被災者同士の対話に耳を傾けるグループインタビューも併用した。調査対象地域では、もともと人が集まれば「お茶会」が開かれる。知り合いと認知されれば「お茶っこ飲んでけ」と声がかかる。そうした場に参加して、住民同士の会話に耳を傾けることで、コミュニティ内の人間関係や出来事についての基礎的情報を知ることができると同時に、現在の暮らしや今後に向けての意識について調査・記録することができた。

さらに、調査期間の途中からは被災者や地域住民のライフヒストリーの聞き取りを調査に加えた。身の回りの具体的な人間関係と経験に即した話を聞く中で、被災地のコミュニティにもともとあった様々な脈絡やつながり、過去の出来事や集落の歴史など、コミュニティを深く理解するための手がかりも得られた。

また、被災した子どもたちが通う学校、被災コミュニティが内包していた様々な小集団の会合、操業を再開できた生業の現場などで参与観察と聞き取り調査を行った。さらに、本研究の調査期間中には、仮設住宅等から退去する被災者が増加し、被災家族のさらなる移動が生じ続けたわけだが、できるかぎりコ

ンタクトを維持し、その後の各人の生活やコミュニティとの関わりを調査し、被災者の安住への歩み出しと、コミュニティの再生・変容の過程を追った。

こうした被災住民への調査と並行して、外部からのボランティアや被災者の内部から生まれてくるボランタリー・メンバー（非常時のリーダー）の活動に同行し、参与観察を行うと同時に、支援する側/される側双方への聞き取り調査も行い、被災地を多面的にとらえながら民族誌的データを蓄積していった。

4. 研究成果

東日本大震災から6年がたち、津波被災地でも被災者の生活再建や地域の復興が目に見える形を伴って進みつつある。しかし、再建や復興のプロセスはそうした目に見える部分だけではないし、また一様かつ直線的なものでもない。被災の程度、行政による施策の影響、震災前から家族やコミュニティに内在していた諸条件、外部からのボランティアとの関わり方等々といった様々なファクターにより多様かつ複雑に展開するものである。実際、遅々として復興の進まないところもあり、また復興・再建支援の本格化が地域コミュニティに変形や歪みをもたらしたケースも少なくない。本研究は、そうした被災地の変容過程の全体を被災地固有の文脈で捉えながら重層的に記録することを試みてきた。以下では、その一端を具体的な事例を交えながら報告する。ただし、本報告ではプライバシーに配慮して個人的なデータは扱わず、コミュニティ単位あるいは集団単位での調査結果に限定する。

本研究で調査を行った地域は、主として宮城県内の石巻市と名取市である。中でも石巻市ではいくつもの集落や仮設住宅で長期間にわたる調査を行い、民族誌的データを積み重ねることができた。2005年に石巻市に合併した旧雄勝町には昔から十五浜と呼ばれる海辺の小さな集落が散在しており、その多くで8割近くの家屋が流出し、犠牲者も出た。住居に適した平坦地もしくは緩傾斜地が海に面した狭いところにしかない浜が多かったからである。また、どの集落でも主産業の漁業や養殖業も壊滅的な打撃を受けた。しかし、その後の復興過程を比べてみると、集落ごとの違いが浮き彫りになる。例えば、A浜では幸いにも高所にあった家々は無傷だった。また仮設住宅が集落のすぐそばに建てられたため、住民が分散することなくコミュニティがそのまま残っている。漁業や養殖業の再建が他より早かったのも、そのおかげである。隣のB浜は、雄勝で二番目に大きい集落であったが、山崩れの危険性もあるため浜全体が危険区域に指定され、全世界帯が退去を余儀なくされた。それでも、高い共同性を持っていたコミュニティは月に一回の自治総会を開き、震災前からの役員が中心となって集

落の今後について話し合っていた。その後、通いで漁をする住民らが外部のボランティアたちと手を組むことで、集落内の活動において中心的な役割を演じるようになり、コミュニティのバランスが徐々に変化していった。最近になって集落近くの造成地に約 30 世帯が高台移転で戻ったが、いったん変じたコミュニティが今後どのような道筋を歩むことになるか見通せない状況である。C 浜では、海に近い一部の家々は津波に壊されたが、半分近くは被害を免れた。被災直後は自治組織（行政区）を解散して各々自力再建を目指すという方針も出されたが、集落のすぐ上に仮設住宅が作られたことで、浜のコミュニティは残った。ところが 2 年ほどして仮設住宅を取り壊して復興住宅に建て替えるという決定が行政から出され、仮設住宅の入居者は遠くの別の仮設住宅にばらばらに移らざるを得なくなった。それから 2 年後の 28 年度、ようやく高台移転の住宅が完成し、浜の外に出された住民たちの帰還が果たされた。お隣の D 浜は 20 世帯ほどしかなく、震災前から区長（集落の自治組織 = 行政区を束ねる長）が先頭に立って限界集落対策の検討を始めていた。被災後は集落の人口がさらに減少することを見越して、高台移転の計画段階からさまざまな工夫を講じてきている。共有の車を用意して買い物や通院を共同で行ったり、助成金でコミュニティセンターを建設し、地元特産の硯石（伝統工芸品の雄勝硯の原材料）や山の木材を活用した新たな工芸品を産み出すための施設として自ら活用し、さらには全国から希望者を募って同センターを制作拠点として提供したり、アイデアの交流を図るなど、小回りのきく零細コミュニティならではの復興が進められている。

生活は多少不便になるものの元の集落の近くに高台移転が可能であった旧雄勝町に対して、同じく 2005 年に石巻市に合併した旧河北町の被災地では、平地にあった集落の全域が危険区域に指定され、人が住めなくなった。近隣での高台移転も見送られ、内陸部の別の地区に復興住宅が建てられることになる。もともとの土地から引き離されることになった地域のコミュニティは、雄勝地区に比べるとかなり多様な展開を見せている。E 集落は 60 世帯足らずの小さい集落であり、もともと強い結束力を誇り、何かあれば一丸となって取り組んできた歴史を持つ。例えば避難所の運営や仮設住宅への入居に関して集落で話し合っ取り決めるなど、再建局面においてコミュニティがしっかりと機能していた。被災直後から自治総会を定期的開催し、神社のお祭りもいち早く復活させた。お盆の法要を合同で一回きり行う形式に切り替え、行政区からのお知らせをその場で行うことなどは、住民総出のコミュニティでなければ実現できなかったろう。また、海に最も近かったのに地形の関係で被害が少なかった E 集落では、通い漁師が住居を納屋や作

業小屋代わりに使いながら漁業や養殖業を再建してきた。その過程で、労力をかけずに済むカキの養殖方法や若い働き手が入ってきやすい環境作りを模索し、担い手不足の解消を図ろうとする動きもあり、復興が変革のチャンスにもなっている。隣接する F 集落は、近辺では面積も人口も最大である。住民の 2 割にあたる 100 名ほどが犠牲になり、家屋はすべて全壊、農地もすべて水没した。農地は国の復旧事業により元に戻ったが、人が住めないこともあって担い手問題が浮上し、農業法人化などを視野に解決策が今後探られることになっている。この集落のコミュニティは、現在 60 代の男性たちが 30 代の頃に組織した「青年会」（彼らが今でもその名で呼ばれること自体、過疎化の現実を物語る）が牽引してきており、当時着任した宮司と協力して祭りの再興や再活性化を成し遂げた経緯もあって、震災の翌年から夏祭りを集落で、神楽舞いを奉納する秋祭りを仮設住宅で催し続けている。また、集落で決議して自力で慰霊碑を建立したり（多くの集落では全国からの寄付や支援金で作った）、他に類例のない震災遺族会を結成したりした。しかし、そうした動きに集落のお寺は関与していない。総代をはじめお寺の主要檀家には犠牲者が一人も出なかったためである。ただ、そうした温度差や社寺間の拮抗関係を内包していることがかえってコミュニティの活力を生み出している面もある。F 集落の人々は内陸部に造成中の大型復興住宅団地にまとまって入居する予定で、その数は他を圧倒している。仮設住宅からいったん外に出た住民（市外や県外に移った人も）が大挙して復興住宅に戻ってくるのも F だけの特徴である。その勢いをもって仮設住宅で催していた集落の祭りを復興住宅全体の祭りに盛り立てていこうという企てもあり、今後の動向から目が離せないコミュニティである。G 集落と H 集落は海に面していないため津波への備えが緩く、大河を逆流してきた海嘯に多くの住民がのまれ、宮城県内でも突出した人的被害を出した。規模の小さい G 集落では 7 割以上の世帯で一人以上の犠牲者を出し、コミュニティがいろいろな面で機能を失った。そうした混乱状況の中で非常時のリーダーとして活躍した人が、仮設住宅への入居後に区長になった。だが、彼は集落ではまだ「新参者」で、家族に犠牲者が出なかったこともあって、大きく傷ついた被災集落の再建に向けてリーダーシップを発揮することは難しかった。そこで、ふるさとの復興を目指す一部住民は、震災から 2 年後に F 集落に倣って震災遺族会を結成した。しかし、コミュニティに求心力を回復させるまでには至っていない。隣接する H 集落は、この地区全体の行政・経済活動において中心的役割を担ってきたところであるが、全人口の 4 割以上が津波で亡くなった。被害の大きさゆえに、仮設住宅の入居にあたっては抽選をすることなく、希望者全

員を一カ所に集める特例がとられたが、そのぐらいのことでコミュニティは維持できなかった。H集落の復興に影を落としたのは、集落内にあった小学校で児童・教職員の8割が犠牲になったという事態である。マスコミ報道などで全国に知られるようになり、まるで巡礼地のように外部から大勢の人が訪ねてくるようになった。そのため元の集落に行くにくくなったと語る住民も多い。また、H集落として集まりを持つことに臆病になっている節がある。O小学校の遺族らの活動やマスコミの取材、検証委員会でのごたごた、訴訟に参加するかしないかでの対立、震災遺構として残すか否かの対立など、住民たちを萎縮させる状況が長期間に及んだためであろう。この集落でも非常時リーダーだった人がその後、区長になっている。彼の身内にも津波の犠牲者がいたが、住民からの信頼を得られなかったようで、住民同士の集まりは減る一方であった。震災前に129世帯約470名だった集落の人口は、現在42世帯約70名(その大半は仮設住宅在住)に減少している。犠牲者の数を差し引いても激減と言える状況だが、転出者の多くはすでに集落のコミュニティを見限っており、「H集落は仮設住宅の中にしかない」と言い切る住民もいる。

以上、被災した集落の復興プロセスのあらましをかいつまんで報告したが、被災者の居住先の移動がコミュニティの土台を揺るがしたり、逆に強化したりすることが見て取れよう。また、行政の施策やマスコミ等の報道が被災地に新たな混乱を持ち込むことがあり、それによって被災者やそのコミュニティが萎縮や停滞に陥ることも実例をもって明らかにできた。

最後にもう一つ事例を挙げたい。調査地に建てられた仮設住宅における外部ボランティアと被災者の関わり方が垣間見れるケースである。I仮設住宅ができた当初、そこには大勢のボランティアが炊き出しや慰問に訪れ、かりそめの賑わいが生まれた。開設後2年ほどは入居者も多く、ボランティアらが主催する仮設住宅の集会所での活動(娯楽やカラオケ、手工芸品作りなど)に集った人たちが仲間意識に結ばれ、集会所コミュニティとも呼ぶべきものが形成されもした。ただ、元気のある世代は外に働きに出るため、メンバーは高齢者が主体であり、そのつながりも薄く緩やかなものであった。そのため、集会所コミュニティのファシリテーター役だったボランティアが時の経過と共に減っていくと、活動も先細りしていった。その中でもわりと長続きした活動が手工芸品作りである。ボランティアが用意した材料を使って作品を作るのだが、自分たちの安らぎのため、あるいは支援に対するお礼のためとして作るうちは和気藹々とした活動であった。それが、被災地の手工芸品としてもてはやされ次々と商品化されるようになると、事情が変わってくる。復興支援をうたう企業などが

間に入り、それなりの品質が求められるようになると、技術面や気持ちの面でついていけなくなる人が出てくる。他方、手工芸品製作を生業と捉え、仮設住宅で仲間を募って本格的に事業化を試みる人も被災者の中から現れる。復興住宅の建設が進み、櫛の歯が欠けるように空室が増えてきた仮設住宅は、ただでさえ疎外感を感じやすい環境である。入居者にとって心のよりどころともなっていた活動のこうした変容は、被災者にさらなる心理的負担をかけるものであった。

復興過程の光と陰とも言える事例だが、ボランティアと被災者の関係は復興が進むにつれ往々にして変容する。それは仕方のないことだろう。しかし、中には継続的に被災地を訪れて支援活動を行ったり、自分たちの地域に被災者を招いたりするボランティア・グループもある。そうしたグループに共通するのは、支援活動を行うことによって自分たちのネットワークやコミュニティが活性化しているという点である。一方通行の支援だけではボランティアは長続きしないということなのかも知れない。

他にも報告すべき事項はあるのだが、実は被災地はまだ現在進行形の復興プロセスにある。次々と新たな変化が生じ、多くの被災地ではまだしばらくは安定的な状況にはならないと考えられる。東日本大震災の前から神戸やインドの震災被災地の調査を行っていた二人の研究分担者になって、私もこれから10年の間は被災地の復興過程を見つめ続け、記録に残していくつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

李仁子「被災地での外国人の支援活動」ソウル大学日本研究所『日本批評』8号、214-237頁、2013年、査読有(韓国語)

二階堂裕子「大災害の被災経験と民族関係 阪神・淡路大震災がもたらした影響の検証」大阪市立大学社会学研究会『市大社会学』13号、1-18頁、2012年、査読有

[学会発表](計15件)

二階堂裕子「東日本大震災被災地におけるコミュニティ再生への歩みとボランティア 宮城県名取市の仮設住宅で暮らす被災者の社会関係の変容」日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学

金谷美和「手仕事グループがつくる「つながり」の諸相 東日本大震災被災地の調査から」日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学

李仁子「被災者の生活再建と「つながり」の諸相 被災地の民族誌に向けての一章」日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学

李仁子「震災被災地コミュニティのゆくえ
旧雄勝町浜の事例から」日本文化人類学会
第 47 回研究大会、2013 年 6 月 9 日、慶應義
塾大学

李仁子「3.11 大津波と供養」日本文化人
類学会第 46 回研究大会、2012 年 6 月 23 日、
広島大学

李仁子「大津波と地域共同体 被災地民族
誌の試み」東アジア文化交渉学会・第 4 回年
次大会「災害と東アジア」、2012 年 5 月 11 日、
韓国高麗大学（招聘講演）

〔図書〕(計 6 件)

金谷美和「集団移転と生業の再建 二〇〇
一年インド西部地震の被災と支援」林勲男編
『アジア太平洋諸国の災害復興 人道支
援・集落移転・防災と文化』明石書店、140-165
頁、2016 年

李仁子「東日本大震災の残された家族に関
する文化人類学的研究」韓国女性政策研究院
『危険社会と家族：家族リスクマネジメント
戦略』21-39 頁、2014 年、(韓国語)

李仁子「外国人妻の被災地支援 被災地の
民族誌に向けた一素描」川村千鶴子編『3.11
後の多文化家族 未来を拓く人びと』明石書
店、139-161 頁、2012 年

二階堂裕子「移民家族の定住過程における
社会関係 在日コリアン 1 世の女性たちの
ライフ・ヒストリーから」『つながりの文
化人類学』高谷紀夫・沼崎一郎編、東北大学
出版会、2012 年

〔その他〕

上羽陽子、金谷美和、中谷文美(2016)「南
アジアにおける糸素材および織機の技術民
族誌的研究」『文部科学省科学研究費補助
金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジ
ア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホ
ール、2016 年 11 月 5-6 日(予稿集 88-89 頁)。
Ueba, Y., Kanetani, M. and Nakatani, A
(2016) An ethnographic analysis of
technologies to produce yarn material and
looms in South Asia. The 1st Conference on
Cultural History of PaleoAsia, The
University of Tokyo, Tokyo, November 5-6,
2016 (Proceedings, pp. 88-89).

金谷美和「インドの「ハンディクラフト」」
『月刊みんぱく』2016 年 12 月号、18-19 頁、
2016 年

金谷美和「環境変化に対応する被災者の選
択とその背景についての文化人類学的研究
2001 年インド西部地震の事例から」林
勲男編『大規模災害被災地における環境変化
と脆弱性克服に関する研究』(平成 20~24 年
度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報
告書) 109-122 頁、2013 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 仁子 (LEE Inja)

東北大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：80322981

(2) 研究分担者

金谷 美和 (KANETANI Miwa)
国立民族学博物館・民族社会研究部・外来
研究員
研究者番号：90423037

二階堂 裕子 (NIKAIDO Yuko)
ノートルダム清心女子大学・文学部・准教
授
研究者番号：30382005